

2017.5.13(土) ゲルマニア会世話人会「田辺とおる氏懇話」を聞いて

沢村智恵子 (D1982)

ドイツ語科を卒業したものの、「ゲルマニア会は遠きにありて思ふもの」と長年決め込んでいた。東京外語会もまた然りである。それが何のご縁か、会社員を卒業した2015年4月より府中大学キャンパス内の東京外語会プラザに勤務するようになり、東京外語会はもちろんであるが、ゲルマニア会世話人幹事の皆さんともつながりができていった。これはやっぱりお手伝いするしかないではないか。そういう理由で、5月の世話人／有志会には会報「ゲルマニア」20号の発送作業から参加させていただいた。さらに言えば、参加を決意（大げさ？）したもう一つの理由が、今回の懇話者、田辺とおるさんなのだ。

東京外語会会報 No. 135（2015年10月1日発行）フォーラムに田辺とおるさんの文章が載っている。タイトルは『おじさん学生、オペラを「読みに」来ました』である。まだ読んだことのない方は是非とも一読していただきたい（<http://kaihou.gaigokai.or.jp/135/forum.html>）。2015年秋にこの文章を読んで、もちろん経歴にもびっくりであるが、タイトルのセンスの良さ、文章の面白さにすっかりファンになった。この文章がとても印象的だったので、世話人会で田辺さんに会えるのなら何をしても行かなきゃ、となったというわけ。

今回の話は上記で紹介した経歴をなぞるものであったが、本人の口から語られると、時に抱腹絶倒、ユーモアに溢れる語り口はわたしたちを魅了した。

高校卒業後、音楽の道を志す田辺少年は、日本の音楽大学ではなく、ザルツブルクのモーツァルテウム音楽大学フルート科へ。フルートを学びながらオペラ通いに熱中するうちに、声楽科へ転向。本人が言うには「こんなおしゃべりが口を塞がれているのが嫌になった」のだそうだ。その後、或る日本人教師の声楽理論に共感し、帰国して武蔵野音楽大学声楽科を卒業。卒業後、国際ロータリー財団奨学金で再度オーストリアへ留学。グラーツ音楽大学オペラ科の傍ら、劇場デビュー。1995年～2000年はドイツの北ハルツ劇場（ドイツ・ハルバーシュタット市）の専属歌手。フリーになった折にベルリンに居を移し、オペラ・オペレッタ・ミュージカル・歌曲だけでなく、俳優・声優活動も行う。何と、映画「ラストサムライ」では渡辺謙の声を独・仏・西語に吹き替えた仕事をきっかけに、渡辺謙のハリウッド作品の吹き替えは全部田辺さんだそう。オーストリア・ドイツに都合20年も滞

在した田辺さんがドイツ語が堪能なのは間違いないだろうが、えっフランス語やスペイン語もできるの？と驚くわけであるが、田辺さんは言う。「いやあ、渡辺謙の英語と同程度ですよ。」

田辺さんは現在、国立音大、名古屋音大で教鞭をとられながら、本年3月本学大学院で修士課程を終え、4月から博士課程へ進学された。研究テーマは第一次大戦前後のドイツオペラ。シュトラウスと同時期に、人気を二分したオペラ作家フランツ・シュレーカーだそう。イタリア・フランスオペラが歌う方も聞く方も楽しそうなのに、なぜか固苦しいイメージのドイツのオペラ。本当はそんなことはないよと、ドイツオペラ・オペレッタの指導・普及にも努められている。

最後に二つほど付け加えて、感想を締めくくりたい。

一つ目は、今回の講話は、田辺さんの歌で始まり、歌で終わったことを言っておかねばならない。オペラ歌手が来て話だけして帰るわけにはいかないと、伴奏なしのアカペラでの披露であった。眼福ならぬ「耳福」の時間をいただけたことに感謝したい。(東京外語会スタッフとしては、今後ゲルマニア会にとどまらず、外語会での登壇もお願いしたいと密かに思っている。)

二つ目は、田辺さんは本郷の外語会事務局勤務の佐伯美穂さん(D1983)と高校の同級生なのである。佐伯さんにこっそり、田辺さんの高校時代について取材をした。オチケン、落語研究会に属し、学内新聞の記者としても活躍。当時から話が面白く、物事の見方が鋭く、論理的にディスカッションするのも長けていた。時に挫折する人も多い中、ヨーロッパドイツ語圏での生活をうまくこなしていく素地を持っていたように思うそう。

マルチな才能をお持ちの田辺さんの研究、そして今後の活動に大いに期待したい。

以上